

ポットラック新聞

the Winter

Vol. 20

特集

港まちで何してる？

まちで偶然出会った人に声をかけました



今日もいつもと変わらずのんびりした時間が流れる港まち。顔馴染みの近所さんや初めて見かける人など、まちのあちこちで偶然に出会ったたくさんの人たちに「何をしているの？」と聞いてみました。

10 ついでに広場から何やら音楽が聞こえてくるので近づいてみると、男性3人がDJのイベントをやっています。最近高ですね、開放感あって、最近はこの「屋外でDJを楽しむ会」をやっているんですね。この広場が借りられると知って、初めてここで開催しました。今回は身内だけで、人数集めてまた開催したいなと思っています。

09 見慣れない大きな犬を連れていた中華料理「二十番」のママさん。そのまわりで「こんなに大きい犬、おれ、初めて見た」と下校途中の小学生たちが大興奮。「うちの息子が飼いはじめたの。いま魚をさばいともんだぞそのあいだ私が代わりにお守りをするの。こう見えてまだ7か月の子犬。ちなみに犬の名前は「ミチくん」。



03 いつも楽しみに「みんなとまちの音楽室」に通って来るといっておじさま。「今日ピアノは倉橋さん。彼女が演奏する日には必ず来るんだ。同じ苗字だから勝手に娘のようには思っただけ。名古屋から車で1時間ほど離れた一宮市から。平日の昼間でしょ？」「私はもう73歳だ。とっくに定年退職して時間はたっぷりあるよ」。

02 夕刻、人影のない港の突端でひとりベンチに座る男の人。こんなところで何していらっしゃるんですか？「……ちょっと海を見てお仕事帰り……でもないんですけどね。」「東京から、ふらりと名古屋に来て。」「東京にいますか。」「実は7、8年前まで愛知県で働いていて、久しぶりに名古屋港に来てみようかなと……あ、特に予定もなく……ええ、日帰りで……そうですね。夕方ですし、そろそろ帰るつもりです」。



01 船が泊まる岸壁と水族館を結ぶ橋の上。ガリーディング埠頭に停泊中の観光クルーズ船から降りてきた二人にすれ違いざまに話しかけるも日本語は通じないよう。身振り手振りで「今日、水族館は休みです」と伝えると、みるみる残念そうな表情に。せつかなので「一緒に写真撮りませんか？」「OK、いいですよ」。その後、船は名古屋港から四国を目指して出航して行きました。

04 ポートハウスで遊んでいた男子3人組。みんな地元？「小学校はバラバラ。だけど中学が一緒。学校が終わって自転車で集まった。よくポートハウスで遊ぶんだ？」「違う。今日が初めて。でも家で遊ぶのと同じだよ。どうせゲームやるだけだし」。港区の中2男子でした。

05 久しぶりにポットラックビルを訪れた元まち協スタッフの稲葉さん。お久しぶりです。「仕事の打ち合わせで来ました。最近あは工房(港まちのサロンのなスペース)でまちのお年寄りを相手に旅のお話し会を開いていて、それでよく顔を出してまけることが多い稲葉さん。おはあちゃんおじちゃんたちは、行ったこともない遠い国のお話についても興味津々だそうです。



Q

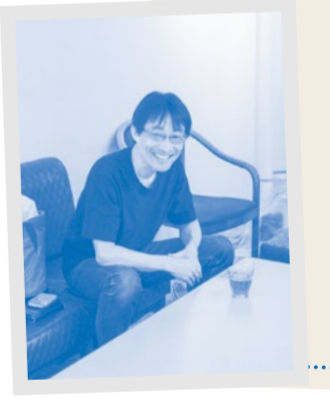
港まちで何してる？

文：谷理由子、倉田果奈

11 江川線沿いの喫煙所でタバコを吸っている4人組を発見。「こんにちは。どうしたの？」「流暢な日本語で答えてくれたタバコ屋の日本人と、4人は近くのビジネススクールに通うネパール人。今は日本語とパソコンの勉強をしながら、夜は居酒屋で働いているとのこと。この近くにネパール料理屋もあるよ、と紹介すると、「まだこの辺りのことは知らないんだ。授業が終わったらいつも日本帰っちゃうんですね。日本に住みやすい国だから、将来はくちや」。そう言い残して、築地口駅の改札口に向かって行きました。



12 築地口の鶏肉店「鳥健」。店頭一番目立つ場所に、阪神タイガース特設コーナーが設置されていた。タイガースのTシャツを着た息子さんが奥から登場。「あ、それね、優勝を祝って飾った。たしかお母さんは東北出身で、息子さんは名古屋ですよ。」「そうだよ。お祖父ちゃんもお父さんもみんな名古屋生まれ。でもうちはみんなタイガースファンと息子さん。」「阪神ファンは情が厚いでね。ドラゴンズのファンは負け始めるとさっさと応援するのをやめて帰っちゃうんですよ。阪神ファンはどんなときも最後まで応援する。情に厚いよ」と教えてくれたのはお母さん。



08 地元では見かけないおはあちゃんが手押し車で大通りを歩いていた。聞けば、丸の内(中区)から引越してきて間もないとのこと。「昔、港は怖いところだとして学校で教わった。住んでみたらやっぱり怖かった。歩いてただけでおねえさん、どこからいりやう？」「どこから来たの？」「ってみんなに話しかけられる。そういうのが最初は怖くて怖くて……。でも、最近になってまちの人たちは親切なのだ気づいたらいい。」「まだ馴染めないねえ。けど、まあ面白いと思うよ。今日はどこへ？」「区役所へ行く。こまま歩いて行くんだがね。え、2キロ近くありますよ。」「大丈夫。万歩計つけて毎日3千歩も5千歩も歩いているから。じゃあ、ちょっと行ってくる」。85歳の愛子さんでした。

07 西築地コミュニティセンターをのぞくと、音楽のことを気軽に学べる、まち協主催の「みんなとまちの音楽室」が開かれていました。そこで一番元気に歌っていたのが松山映子さん。「名前はえいこ。映画の映で映子。だから本当は「えいこちゃん」で呼んで欲しいんだけどさ……」。みんなとまちの音楽室が大好きすぎて熱心に通いつめていたら、誰からも名前前で呼んでもらえなくなったのだそう。で、みんなには何て呼ばれていいんですか？「こじや、私のことをあだ名みたいに「常連さん」で呼ぶのよ。それで通るようになったら、常連さん」とちょっと不服そう。それでも歌で鍛えたいハリのあはあで「歌が恋人よ」とこ機嫌でした。



15 日暮れ時の稲荷公園では大勢の子どもたちが遊んでいました。中でもとりわけ元男の子と小学一年生のお姉ちゃん。かたわらで二人を見守るお母さんに声をかけました。「今日は遠足だったんです。さんざん遊んだのにまだ遊び足りないって言うもんだから、遊びの続きに付き合っています」。港区のお隣、熱田区の中央卸売市場で早朝から働いているというお母さんは、「もう眠くて眠くて。早く帰りたいんだけどなあ……」と少々お疲れ気味の様子でした。

16 歴史ある海運会社「嘉栄商會」の前を通りかかると、以前、ポットラック新聞の取材で花壇の話をお聞かせくださった蝶々が大好きな会長さんの姿が。今年も花壇に蝶々はやってきましたか？「来てくる。こっちは来てくれた。葉の裏にヒョウモンチョウのサナギがあるでしょ。スミレには幼虫もある。レモンの木にはアゲハが卵を産んでいったよ……。今日も植物のお世話に余念がありません」。



14 休館日の水族館前、自動販売機で飲み物を買ったお母さんに出会った。今日、水族館お休みですね。「いいの、水族館はとって海を目指して港までドライブしに来ただけ。北区に住んでいるんです。二人で港に来ることなんてめったにないから超楽しい」。まるで姉妹のように仲良しなクラウドさん親子でした。

13 水族館前で休憩している中、「アリアバダ」っていうレストランに行こうと思ったけど入れなかった」と言いながら私たちに声をかけてきた男性が。今日、水族館休みですもんね。「あそこ、思い出しの場所なんです。片思いの人との……でもいいんです。また来ます……」。

17 人影もまばらなナイトランド(港の遊園地)の前で出会ったラジールの親子3人組。地元の方ではないそうです。今日はご家族で遊びに来たんですか？「いえ、港警察署に忘れ物を受け取りに。とても大事な書類を置き忘れてしまいました。それは大変！と、急ぎ足で警察署に向かう3人の後ろ姿を見送りました」。



西築地小学校トワイライトスクールへのアーティスト派遣
 港まちづくり協議会が行う事業の一つ。放課後に小学生たちが集う場「トワイライトスクール」にて、辻將成さんとミュージシャンのテライシヨウタさんが、それぞれ年6回のプログラムを実施。

小学生とのワークショップを通して感じた港まちでやってみたいこと。

のトワイライトスクールの具を乗せた紙の上でぐるぐる回したりスライドしたりして盛り上がりがあります。何をしているんでしょうか？講師であるアーティストの辻將成さんに話を聞いてみました。「ダンス・アートのワークショップをしています。ダンスの回では、「フレイクダンス」といって動きを面白がっていたけれど、絵の具を使うことで成果物が残っていくので、色や線の面白さに注目するようになっていったという変化がありましたね。辻さん自身もダンスの軌跡を様々なマテリアルを使用して制作・発表を行っています、今回絵の具を使った作品シリーズをベースにしたワークショップをすることができたのは嬉しいことです。」

今後港まちでやってみたいことも聞いてみました。「老若男女関係なく規模感を広げて、一緒に時間を過ごせたら面白いかなと思います。数日かけて港まちを巡りながら、作品制作もしてみたいですね。月に一度訪れるようになって、まちの景色は馴染んでしまいましたが、あるようでもないかな、ないようでもあるかな、まだ掴みきれないままだったので、なんでもありそうだから、生活は完結しそうだけど、まだないものもあるのかなって。ダンス・アートのコミュニティもあるのかな、とか。もっと港まちを知ってみたいですね。」



港まちで「何してる？」と聞いてみたら たくさんの味わい深い物語が見えてきた。

文：谷亜由子



名古屋みなとミュージックストリート
 11月19日、ガーデン埠頭のつどいの広場で開催された屋外イベント。県内外から集まったストリートミュージシャンおよそ70組が参加。港まちづくり協議会が主催する提案公募型事業のひとつ。

港で喫茶店を始めてみて気づいたまちのお年寄りたちの気持ち。

まちで出会った人に「何をしているの？」と話しかけたら、どんな答えが返ってくるだろう。今回はそんな素朴な興味から取材を始めました。はっきりとした狙いやテーマを決めずにまちに出るのは初めてのことで、少しだけ不安もありましたが、ちょっと不馴れで唐突なインタビューにもかかわらず、みんなが快く答えてくれたのは嬉しい誤算で、思っていた以上に楽しい取材になりました。わざわざ仕事の手を止めて、古いアルバムを持ち出し家族の歴史を振り返ってくれた人や、初対面の私に片思いのひとの大切な思い出を問はず語りに聞かせてくれた人、埠頭では、大型客船でやってきた外国からのお客さんが、身振り手振りでインタビューに応じてくれたりも。港まちとの関わり、目に映る景色、いまこの瞬間の生き生きとした気持ち…。次から次へと30人近い人たちのエピソードに触れてみて、港まちを舞台にした一本のオムニバス映画を観た後のような心地よい余韻に浸っています。港のあるまちならではの独特の情緒、それを生み出しているのは、ただすれ違って挨拶を交わしただけでは知り得なかった、そんなささやかな物語たち。まちのあちこちに小さく味わい深い物語がまだまだたくさん散りばめられているのだと思うだけで、まちへの愛着が一段と深まっていくような気がします。

名古屋港ガーデン埠頭に向かう途中、楽器の音や歌声が聞こえてきました。音のする先は港に面した「つどいの広場」。あちこちで何組ものミュージシャンが一斉に演奏中。盛り上がる会場の様子を熱心に撮影していた男性に声をかけると、この方がイベントを企画した港区在住の矢神さんでした。音楽関係の会社の社長で名古屋市内で何軒かの喫茶店も経営しているそう。「築地口にもお店を持っていて、ミュージシャンを呼んで頻りにライブをやっています。毎回20〜30人くらいお客さんが来てくれる。東京や大阪からもね。けど、地元の人にはほとんど来ないんですよ。本当はもっと地元の人を呼びたいんだけどね。今回が初開催だ！というイベントに、並々ならぬ想いで取り組んでいるという矢神さん。そこには切実なまちの事情があるそうです。「港もどんどん高齢化してしまっている。喫茶店やるとそれが実感するんです。毎日いろんなお年寄りがやってきて何時間でもずーっとしゃべっていく。旦那さんを亡くして一人になっちゃったおばあちゃんとかさ。みんな寂しいんだね。そんな人たちに楽しませたいんです。」

お年寄りたちが屋外でもくつろげるよう広場に畳を敷いて、演奏に演歌も取り入れたらいい、次なる構想も語ってくれました。世代を越えてみんなが楽しめるまちの名物イベントを目指しているそうです。

港まちで気になる動きをしていた4人にあらためて話を聞いてわかってきたこと。

ユダ・クスマ・ブテラ
 海外からアーティストを招き、活動をサポートする「港まちAIR エクスチェンジ2023」に参加。11月からおよそ2か月間、港まちに滞在し、ファミリーポートレイトシリーズに取り組んだ。



初めて訪れた日本の港まちで インドネシアのアーティストが 感じた家族の印象。

港まちの喫茶店「真砂」で出会ったユダさんは港に滞在中のインドネシア人アーティスト。港まちで家族写真を撮影中とのことですが、家族写真と言っても全員の前は見えない、ちょっと風変わりな作品です。これはユダさんが6年前から続けている「ファミリーポートレイト」という作品シリーズなのだそう。「家族はひとりひとり役割を持っていて、表に見えないところでも常に支え合うチームのようなもの。一つの共同体である家族を写真で表現しようと思ひ、この作品シリーズが生まれました。インスピレーションのきっかけは自分が結婚し、家族を持つようになったこと。他の家族にも興味を持つようになった。誰かを撮る時に誰の顔を出すか、誰を真ん中にするのかなどは被写体となる家族の方に決めてもらいます。するとその家の個性や家族同士の関係性が見えてくる。そこが興味深い。日本の家族は大人が子どものベースに合わせていることが多い印象ですね。」

そんなユダさん、普段はアーティストとしての活動のかたわら、プロの写真家として仕事をしているそう。仕事柄、古い写真にも興味があり、滞在中、たまにご飯を食べに来た真砂で、写真好きなマスターに昔の写真を見せてもらったことで話が盛り上がりました。そこで今回の家族写真の作品への協力をお願いしてみたところ、快く参加してくれたのだとか。初めて日本、日本の人は恥ずかしがり屋なイメージがあったので最初は上手くいかか心配でしたが、思っていたより順調に作品づくりが進んでいます。目標は15。いま5作品くらいできました。この調子でまだまだいい作品ができそうです。

15年前に廃業したはずの店内で 離れて暮らす娘さんが今、考えていること。

靴の登久屋 (トクヤ)
 築地口商店街で60年近く続いた靴店。昭和の初期に、由紀さんのお祖父さんが下駄や草履の鼻緒をすける(穴などにさし通して結ぶ)技術を身につけ、はきもの屋さんに開いたのがはじまり。全盛期には二代目を継いだお父さんとお母さんが築地口にそれぞれ店を持っていた時代も。



築地口商店街。何年もずっと閉まっていたある店のシャッターが開いていました。ここは15年ほど前に廃業した靴の登久屋。築地口で生まれ育ち、今は嫁ぎ先の京都で暮らしているのは由紀さんの姿を見かけたので声をかけてみました。「ずっ」とほつちかしてあったお店の片付けをしてくるんですよ。今までみなと祭とお正月くらいしか帰って来なかったんだけど、最近は月に3回くらい来ています。というのも、父が6年ほど前に亡くなって今年に入って今度は母が倒れたんです。しつかりしてはいると思ってるんですけどね。久しぶりで店のシャッターを開けたら作り付けの棚とかもそのまま残っていた。奥には靴の箱が100箱ぐらいい残っていて、なんだか懐かしくなっちゃった。」

すると突然、由紀さんが「ちょっと待って〜」と言い残り、すぐ近くの実家に走って行きました。数分後に戻ってきたその手には古いアルバムが。「ほら、昔の店の様子が写ってるですよ。店っばいには商品が並んで。商店街にもこんなたくさん人がいて。由紀さんが子どもの頃の築地口商店街はとても賑やかで、お店もずいぶん繁盛していた様子。ここにいるとつい思い出に浸ってしまう、なかなか作業が捗らないようですよ。」

「店の中の壁が鏡になってるので朝はその前でラジオ体操したり、昼間は大きな声で歌いながら作業したり。少しずつ進んでいます。前を通る人が覗いていくけど、それもいいかなって(笑)。二、商店街の入り口でしよう。うちがいづつでもシャッター閉めたままじゃ、まちの雰囲気まで寂しくしちゃ。せめて私が来た時だけでも開けておきたいんですよ。これからのこと？ そうね、道方に暮れちゃいけないから、ぼろぼろ考えなくちゃね。」

20号目にしてはじめて地図を表紙に。道案内の地図じゃなくて記録帳としての地図。ピンだらけになったみんなのGoogleMapも見てみたい。(竹)／ひとます30人くらいに話しかけてみよう。どんな紙面になるかは取材次第！という実験的な今号はスリル満点でした。谷さんにも感謝です！(倉)／野良猫を見かけるたびに恋に落ちているほくです。ここだけの話、民族誌の遠山さんによるイラストを毎回ホームページの壁紙にしています。(ヒ)



ダイビングプロショップアルタ 港区

名古屋市港区入船 2-2-7
営業時間は日によって異なります。まずはご連絡下さい。
TEL：052-654-0473 / 月・火休み

水中からみなとまちを支える
アルタさんはダイビングスクールの他、水族館や水門、橋などの港湾施設で水中の調査や掃除などを行う潜水作業をされています。
水中での肉体的作業が必要とされる仕事柄、以前は男性が多い環境でしたが、最近では潜水士の数も減る中、女性社員が増え女性にも出来る業務で活躍の幅を広げ、みなとまちを水の中から支えています。
近年では水中ドローンの事業にも力を入れているそう。校長の増田さんが、水中ドローンで川や海の環境と私たちの生活を繋げるプロジェクトについて生き生きとお話してくださいました。
泳ぎが苦手な私は水の世界とは縁遠いと思っていましたが、私の住む町の川も海に繋がっているのは当たり前なのに忘れていたことを思い出しました。
水中ドローンから水の世界を覗いてみたいくなりました。

かわら版的 港のお店紹介

港まち限定で毎月発行している「ポットラック新聞かわら版」のライターが港まちのオススメを全国のみなさんにご紹介します。第10回の担当は、はやかわさんです。



ライター：はやかわ
動物アレルギーだけどね好き。もうねこは飼えないので町中でねこを見て癒されています。でも昔ほど野良猫がなくて寂しいです。



マンガ/宇佐江みつこ
名古屋市在住の漫画家・イラストレーター。岐阜県美術館のSNSで4コマ漫画『ミュージアムの女』を連載中。

行ってきた場所

木枯らしが吹く中、西築地小学校のトワイライトスクールへ。元気な歌声に寒さも吹き飛ばす。11月の港まちブロックパーティーでは、テライさんと一緒に歌の発表もしたそうです。

まちかど 相談室

今回の答える人

藤井裕子さん・友希栄さん/今回は、きき姉妹のかわいいママ(2度目の登場)とその娘さんのやりとりをまとめました。

【今回の相談ごと】朝ごはんの正解を探しています。パン派だとかごはん派だとか、中にはヨーグルト派もありますよね。以前はおにぎりを作ってみたり、通勤途中に菓子パンを食べてみたりした結果、今はプロテインを飲むことに落ち着いています。でもこれが正解だとは思えなくてまだまだ模索が続きます。朝ごはんの正解ってありますか。(質問者:コヒガシ(港まち在勤))

【回答】「好きなもん食べた方がいいのよ。パンならパン、ごはんならごはん！けど、その人に合った食事があると思うわ。」「確かにー」「ライフスタイルや体調の変化だったり？朝が忙しいならすぐに栄養が摂れる飲み物かもしれないし、時間に余裕があるならしっかり作って食べてもいいし、正解はないわね。それぞれだから。」「食文化も多様化してるよねー」「でも、まずは自分の体を知ることが大切かもね。朝ごはんに限らないと思ったり、少し重さを感じる時はビタミンを意識することもあるわね。」「低血圧気味なら鉄分とか。」「でも、必要なものは体がよくわかっているから、食べたいと思ったものを食べるのが正解なのかもね。」

※ふとした悩みがあれば、港まちづくり協議会までお寄せください。メールアドレスは↓に。

ポットラック新聞 -the Winter- vol.20

2024年2月6日発行

- 企画 港まちづくり協議会
- 編集 竹内厚 (Re:S)
- デザイン 小島邦康 (Artical inc.)
- 進行 倉田果奈、小田ビニシウス (港まちづくり協議会)
- 撮影 三浦知也、倉田果奈
- 企画協力 Minatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya] (青田真也、吉田有里)
- 印刷 東海共同印刷
- 発行 港まちづくり協議会
〒455-0037 名古屋市港区名港1丁目19番23号
Minatomachi POTLUCK BUILDING
TEL | 052-654-8911
MAIL | info@minnatomachi.jp

official Website
www.minnatomachi.jp

official Facebook
www.facebook.com/nagoyano.minnatomachi

港まちポットラックビル instagram
potluck.paper2017

港まちづくり協議会
JOINT COMMITTEE OF PORT TOWN

Minatomachi
POTLUCK BUILDING

港まちごはん!

二十杯目



木村さん家

社長！今夜お家に行つて良いですか？いきなりの来客にもサツとおもてなし

港まちご飯というのやっておりまして…よろしければおうちのご飯を取材させていただけないでしょうか？と、電話口でオファーをしたら「ゴボウをちょうど煮たのよね…今日来る？」と、いきなりのオッケーに取材陣も驚きそのまま取材へ。到着してすぐ「うちは全然食べないから好きなだけ食べて〜」とテーブルに目を向けると、あじの開き、キノコと大根の漬物、なみさん曰く、「ゴボウを煮た分らないもの」の他にサラダやおせち、とにかくテーブルはいっぱい！こんなに僕らがいっぱいやって良いの！？と聞くと、「ウチは昔から友達が家に急に来たり、頻繁に来たり、仕事終わって帰ってくるともう友達が先に家で食べてたりしてたから〜」と。簡単でサクッと作れるものを意識されているなみさんの手料理は味がしっかりしながらも優しいおもてなしの味でした〜！お酒に合う料理も多くて、次はぜひお酒のお供に味わいたいです！

港まちの暮らしの中にある「美味しい!」を探る「港まちごはん」。今回は、「普段はお酒がメインで私たちはそんなに食べないのよ」という木村さん家の晩ご飯に新年明けましておめで突撃！あじの開きにおせち、あれ？けっこう多いぞ…？



この日の「ゴボウの煮もの」材料

ゴボウ/しいたけ/こんにやく

作り方

こんにやくを湯掻いて、しいたけを水に戻して、ゴボウとしいたけと出汁、みりんと醤油と砂糖をちよつと入れたかな。ちよつと甘くなったから最後七味で整えるのよ。煮込み時間は1時間くらい。あっ！にんじん忘れちゃった！こんにやくはスプーンで千切りました〜。

※港まちづくり協議会は、ポータル名目設置に伴い競艇を施行する自治体(蒲郡市など)から名古屋市に交付される環境整備協力費を用いたまちづくり事業を、住民と行政との協働により検討・実施しています。※本紙に掲載されている内容の無断転載、転用及び複製などの行為は、遠慮ください。